

**学生の力を被災地に届ける：早稲田大学平山郁夫  
記念ボランティアセンターの活動（東日本大震災特  
集号）--（特集 東日本大震災とNGO/ボランティア  
・セクター）**

著者	岩井 雪乃
雑誌名	国際地域学研究
巻	-
号	15
ページ	40-49
発行年	2012-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00003661/">http://id.nii.ac.jp/1060/00003661/</a>

# 学生の力を被災地に届ける —早稲田大学平山郁夫記念 ボランティアセンターの活動—

岩 井 雪 乃\*

## 1. はじめに

早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター（WAVOC）は、社会に貢献する人材を育成することを目的に、2002年に設立された機関である。18の科目（正課）および32のボランティアプロジェクト（課外）を運営し、年間に約1万5000人の学生が事業に参加している。そのWAVOCは、震災以降、のべ1263名の学生および教職員のボランティアを復興支援として被災地に送り出してきた（2011年9月末現在、表1）。この活動は、早稲田大学が実施する復興支援の3つの方針のうちのひとつ「被災地域への支援」として位置づけられている（図1）。

とはいえ、未曾有の災害に対して「どのような支援を実施すべきなのか」「WAVOCとしてできることは何なのか」初めから見通しがあったわけではない。多くのボランティア団体がそうであったように、WAVOCでも刻々と変化する状況に合わせて「WAVOC 式復興支援ボランティア」を模

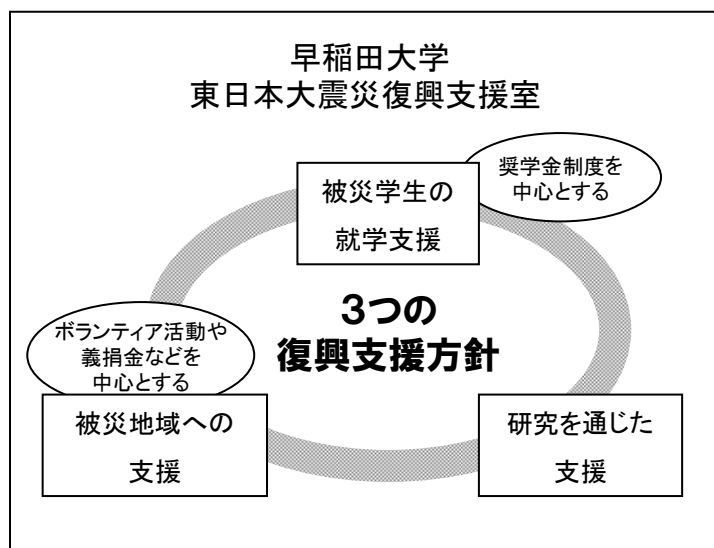


図1 早稲田大学の復興支援

\*早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター；The Hirayama Ikuo Volunteer Center, Waseda University

表 1 2011 年度前期(4 月 1 日～9 月 30 日)の活動派遣一覧

	NO	便名	日付	人数合計
				1263
泥かき・がれき拾い	1	石巻先遣隊	4/11-4/12	28
	2	石巻第 1 便	4/21-4/22	48
	3	石巻第 2 便	4/25-4/26	51
	4	石巻第 3 便	4/27-4/28	55
	5	田野畑先遣隊	4/21-4/25	7
	6	田野畑便	4/29-5/5	33
	7	栃木県益子町	5/28-5/29	13
	8	気仙沼第 1 便	5/27-5/29	19
	9	気仙沼第 2 便	6/3-6/5	33
	10	気仙沼第 3 便	6/10-6/12	57
	11	気仙沼第 4 便	6/17-6/19	63
	12	気仙沼第 5 便	6/24-6/26	57
	13	宮古第 1 便	7/1-7/3	31
	14	大槌第 1 便	7/8-7/10	59
	15	夏休み第 1 便(陸前高田)	8/22-8/24	36
	16	夏休み第 2 便(陸前高田)	8/29-8/31	40
	17	夏休み第 3 便(大槌)	9/9-9/11	27
	18	夏休み第 4 便(陸前高田)	9/16-9/18	81
イベント	19-22	石巻、名取など計 4 便		117
スポーツ	23-28	レスリング、柔道など計 6 便		137
文化	29-39	学習支援、音楽など計 11 便		271

索してきた。本稿では、大学によるボランティア活動の一例として、その過程を報告する。

## 2. 相次ぐ学生からの問い合わせ

「現地にボランティアに行きたいです」「WAVOC では何かしないんですか？」3 月 11 日大震災発生後、WAVOC には学生から次々と問い合わせがあった。

「何かしたい！」 テレビに映る津波の壮絶な光景を見ながら、誰もがそう思っただろう。ましてや私たちは「ボランティアセンター」で働いている。震災直後から、学生や学内外の関係者から多数の問い合わせを受けることとなり、社会からの期待と社会に対する責任を強く感じていた。

### 学生震災ボランティアの心得10か条

#### 第1条 ボランティア保険に入る

ボランティアの基本は「自己責任」です。何か事故や病気があっても自分で対応することになります。保険に入ることはそのための準備になります。

#### 第2条 自分の食料と寝る場所は自分で確保する

「とりあえず避難所で食べて寝ればいいや」というのは間違いです。特に、夜は治安の問題などもありますので、安全に宿泊できる場所をあらかじめ確保してください。

#### 第3条 被災地では信頼できる人と一緒に行動する

活動をするにあたっては安全に十分に注意してください。性暴力など被災地で起こりがちな危険な問題に巻き込まれないためにもできるだけ単独行動は避けてください。

#### 第4条 被災者が自分たちでやる仕事を取らない

被災地に行くことをすべて「やってあげたい」という気持ちになりがちです。しかし、復興するのは現地の人たちです。その力をどう応援できるかが大切です。

#### 第5条 涙が止まらなくなったら活動をやめる

悲惨な現状や嗚咽する人などに接する場合、自分も心の傷を受けることがあります。自分の心をコントロールできない時はその場から離れたり自宅に帰る決断をしてください。

#### 第6条 できないことは「出来ません」とはっきり断る

被災した人の依頼を断るのは難しいことです。しかし、無償のボランティアでも「やります」と言ったことには責任が伴います。無責任にならないよう行動することが必要です。

#### 第7条 不眠不休で頑張らない

被災地では気持ちも高ぶり使命感から精一杯活動することにもなりがちです。しかし、疲労から病気になることは被災地の迷惑になります。休むなど体調管理に注意してください。

#### 第8条 被災者の写真はとらない

友人や仲間に報告するために写真を撮りたくなと思います。しかし、そこは被災者の空間です。原則として被災者や倒壊した家、ボランティアの集合写真は控えてください。

#### 第9条 まずは相手の話を聞く

被災者を少しでも元気づけようと「〇〇さんの分まで頑張ってください」「元気になってください」と言いがちです。励ましの言葉を軽々しくかけないことも大切です。

#### 第10条 ボランティア活動の運営について批判はしない

被災地のボランティア活動では「仕事がない」、「指示が悪い」などの批判もあります。しかし、憤慨しても何も生まれません。できることは何かを自分で考えて行動しましょう。

図2 震災ボランティアの心得10か条



泥かきのための重装備(石巻市)



タンクから流出したオイルまみれの泥をかき出す(気仙沼市)

しかし、何をしたらいいか？ WAVOC が提供できる支援は、「学生ボランティア」である。若くて元気でまとまった人数はいるが、特別な専門性はないのはもちろん、社会常識すら十分にあるとはいえない。この資源を活用して何ができるのか？ 震災直後は、情報が限られていた。結果的に、3 月中は、支援形態を模索する迷走期間となった。

もともと WAVOC は、被災地域にあまりつてがなかった<sup>1)</sup>。そこで考えたのは、「学生を派遣するよりも、むしろ避難者を大学の施設で受け入れる」という案だった。震災直後の混乱期にリスクを冒して学生を現地に派遣するよりも、むしろ現地からの避難者を東京近郊で受け入れることを考えたのだ。しかし、大学側からの GO サインはすぐには下りなかった。大学全体としてどのように復興支援を実施していくか、理事会が議論している最中だったため、各部署での取り組みの検討は後回しにされた。予算はつかず、動き出せない。理事会からの回答待機の状態が続いた。これは、大学という大組織の一部に設置されたボランティアセンター故の、機動性の低さであった。

結局 3 月にできたことは、ホームページ上で学生への情報提供だった。闇雲に現地に行って迷惑をかけないように呼びかけ、さらに、行く場合に必要な心がまえを「震災ボランティアの心得 10 か条」にまとめて掲載した。この 10 か条は、短い文の中に厳選された重要要素を盛り込んでおり、WAVOC の過去 10 年間の学生ボランティア支援の経験を凝縮した成果といえる（図 2）。

### 3. まず、石巻へ

待機状態をブレイクスルーしたのは、4 月 1 日から着任した加藤助教だった。農業経済学を専門とする加藤は、宮城県石巻市および東松島市で調査をしており、現地の土地改良区職員とつながっていた。このルートから、「現地ではボランティアを必要としている」「石巻市災害ボランティアセンターでは県外ボランティアを受け付けている」など、リアルタイムの現地情報が入手できるようになり、被災地への学生派遣が現実的になってきた。

この時点では、すでに多くの被災地に災害ボランティアセンター (DVC) が立ち上がっていたが、何十とある DVC の中から、どの地域のどこにアプローチするのかを決めるのに躊躇していた。事前に受け入れ先と細かな打ち合わせをして学生を派遣したいが、そのような問い合わせの電話すら迷惑になってしまうのではないかと危惧したのである。このあたりは、緊急災害時の経験がないため、どこまで飛び込みで動いていいのか、判断が難しい点であった。

そして、石巻が候補にあがってからも「なぜ石巻なのか？」を、学内のさまざまなレベルの会議で説明を求められた。「早稲田大学」の看板を背負っての活動となるため、関係者が納得できる理由が必要である。被災した学生や校友は被災 3 県に広くいる。その中で、なぜ石巻なのか？ 正直なところ先の見通しは立っていなかったが、「情報を入手しやすい石巻で WAVOC 独自の支援モデルを作り、さらに他の被災地に展開する」という位置づけで、先遣隊の派遣が決まった。

震災からちょうど一ヵ月後の 4 月 11 日、学生 22 名と引率教職員 6 名の計 28 名を乗せた大型バスが大学を出発した。深夜に出発、翌日の日中に作業をして、夕方帰路につき、その日の終電に間に

合うように帰京するスケジュールだった。現地での作業は、石巻 VC の指示のもと、高校の校舎に流れ込んだ瓦礫の運び出しと泥かきだった。たった1日の活動ではあったが、「大学生ボランティアにもできることがある」ことを確認できた。

そう思えたのは、活動した高校の先生方が、帰り際に深々と頭を下げて「ありがとうございました」と言ってくれたことが大きい。30人がかりで実質6時間の作業、それで片づけることができたのは、たった2教室だけだった。まだ手のついてない教室が、廊下の先に続いていた。しかも「2教室を片づけた」と言っても、教室の中にあつた使えないものを校舎の前に出しただけで、その日は、校舎前が通れなくなくなるほど瓦礫が積みあがっていた。学校前の道路わきにも、そのような瓦礫が積みあがっていて、いつ来るかわからない自衛隊トラックの回収を待っていた。「授業が再開できる日」は、かなり遠く感じられた。多くの学生は、被害の大きさを身を持って知り、自分たちの限界を感じていた。それにもかかわらず、先生方は感謝の意を表してくれたのである。そこから学生リーダーは、「自分たちは微力だけど無力ではないと思えた。先生方から見たら大きな進展であることが伝わった。特別な能力がなくても、力がある人もない人も、泥かきでは役立つ」と語った。

このような先遣隊での経験を経て、「泥かきボランティア」が被災地にとっても学生にとっても意味のある活動だと確認し、以降、このスタイルを継承した「車中泊弾丸泥かきボランティア」が、WAVOC の主な活動となっていた<sup>2)</sup>。

#### 4. 「泥かきボランティア」を安全に実施する工夫

リスクの高い被災地に学生ボランティアを派遣するにあたっては、震災以前から WAVOC が実施していた、海外へのボランティア派遣の経験が生かされた。例えば、手続きとして必要な①誓約書（保証人の署名つき）の提出、②ボランティア保険への加入は、海外ボランティアで実施していたものを応用することができた。また、実際に事故や傷病事例も経験していたため、緊急時の連絡体制や、死亡事故などの重大なケースにも対処する仕組みが大学内にすでに整っていた。

また、出発前に2回の事前講習会への参加を義務づけ、学生の危機管理意識および主体的意識の向上に努めた。特に留意した点は、①危険な地域に行つて危険な作業をすることを自覚させる、②十分すぎる装備を準備させる、③班を編成し仲間意識を育てる、④係を与え能動的姿勢を引き出す、である。③では、5人前後の班を編成し、互いに顔と名前が一致する関係をつくって、緊急時に助け合う関係を確保した。④では、学生リーダー、班長、用具係、保健係、写真係などをもうけ、学生が自分たちで運営する意識をつくった。これらにより「大学に、誰かに連れて行ってもらふ」意識がなくなり、責任ある行動をとるようになってくる。このような、学生の主体性を引き出すノウハウも、震災以前からのボランティア派遣の経験を生かすことができた。



バスを降りて、駐車場で身支度



活動後の「ふりかえり」のミーティング

## 5. ボランティア派遣を支える体制づくり

石巻の先遣隊を皮切りに4月中に計4便のボランティアバスを派遣しつつ、そして同時に「派遣を支える体制づくり」が進められた。既存の WAVOC スタッフ（教員4名、専任職員3名）が従来業務を削りながら実施する体制は、早くも4月に息切れが見えていた。4月半ばには事務長の外川が倒れてしまった。ましてや5月からは、開始が遅れていた授業が始まる。復興支援ボランティアに振り向けられる労力はますます限られる。

そこで外川は、人事課をはじめ関係部署や大学理事を回り、人員の増強を求めた。その結果、①契約職員の増員、②学内の専任職員から有志を募る、の二つの方法が取られることになった。これによって、旅行会社勤務経験をもつ橋谷田職員が、復興支援ボランティアの専任コーディネーターとして配属された。さらに、他部署の職員から有志を募ったところ5名から立候補があり、ボランティア派遣業務を担う「有志チーム」が結成された。この有志チームは、本属部署の従来の仕事をこなしつつ、追加でボランティア派遣業務を担わなければならず、たいへんハードな職務であった。しかし、これらの人材の補強によって、コンスタントな学生ボランティア派遣が可能になった。

さらに資金的には、WASEDA サポーターズ倶楽部<sup>3)</sup>から、2000万円の提供が5月に決定し、資金的にも心配せずに動ける体制が整った。

## 6. 校友との連携

校友（卒業生）との連携は、WASEDA サポーターズ倶楽部を通じて資金提供を受けただけでなく、石巻以外の活動地の開拓においても重要なリソースだった。4月に大学校友会から被災地域の校友あてにお見舞い状が送付され、5月には多くの校友から返信ハガキが届いた。校友を支援対象とすることは、学内でも理解を得やすいだろうと考え、このハガキを1枚1枚確認する作業を WAVOC スタッフでおこなった。そして、「ワセダ学生ボランティアの派遣待つ!!」とのメッセージを記し

た宮城県気仙沼市の校友に連絡を取り、ボランティア受入れをアレンジいただいた。この協力によって、5月末から6月末にかけて、週末5週連続で、泥かきや瓦礫片づけを実施した。

また、気仙沼市に隣接する岩手県藤沢町の校友からは、「廃校になった小学校をボランティアの宿舎として提供できます」という申し出をいただき、そこを拠点にして周辺の被災市町村へのボランティア派遣が可能になった。

これらの校友の方々は、活動に訪れる度に、学生に対して震災当時の様子や現在までの変化について、貴重な体験を話していただいた。泥かき活動では必ずしも被災者の方々と接したり話したりする機会があるわけではないので、このようなお話の機会をいただけたことは、引率する教職員としてたいへんありがたかった。お話からは、先輩方の「後輩の現役学生たちに、この震災のことをしっかり知ってほしい」という教育的配慮と、「これからの復興の力になってほしい」という大きな期待がひしひしと伝わってきた。このような交流によって、学生も教職員も責任感を新たに活動に取り組むことができた。

こうして、学生のマンパワー、教職員の企画調整力、校友からの資金提供および受け入れ協力がうまく連携し、「学生・教職員・校友の総合力による復興支援ボランティア」の体制が形成されていた（外川、2011）。

## 7. 学生の成長、教育機関としての役割

復興支援ボランティアの体制づくりの過程で、教育機関の機能をもつ WAVOC が悩んだ点が2点あった。それは、①学生の成長をうながす「ふりかえり」をどこまで実施するか、②ボランティア活動を単位認定するかどうか、であった。

### 7-1 「ふりかえり」をどこまで実施するか

WAVOC では、ボランティアをやりっぱなしで終わらせるのではなく、教職員の指導のもとに活動の「ふりかえり」を実施している（内省的考察、リフレクションとも言われる。和栗、2010）。WAVOC のふりかえりには、さまざまな場が重層的に設定されており、学生グループ型、教員介入型、現場の関係者介在型、報告文型、プレゼン大会型など、やり方も時期も異なる形で、学生は何度も何度も自分の活動をふりかえる仕組みになっている。これは、WAVOC の教育および人材育成の肝であり、「WAVOC メソッド」（岩井・兵藤・秋吉、2010）でも重要な位置づけとなっている。

しかし、大人数を派遣することが求められている「泥かきボランティア」では、上述のような丁寧なふりかえりを実施することが難しくなる。まず、人数が多いこと、そして、参加者のコミットメントが短期間であること、が障壁となる。震災以前の WAVOC ボランティアでは、ひとつのチームが5-15人ほどの学生であったのに、泥かきボランティアでは、30人から多いときには60人以上になる。これでは、教員が丁寧な指導をするのが難しい。また、大人数を集めることを優先すると、必然的に初めての参加者を多数受け入れることになり、リピーターは少ない。そのため、互い



の信頼関係を築いてこそできる「深いふりかえり」に到達するのが難しくなってしまう。

4月、石巻への連続派遣の会議をしているときに、「ふりかえり」のあつかいが論点になった。その結果、WAVOCとしては、現状では、被災地に求められている「より多くの泥かきボランティア」のニーズに応えることを優先させることを決めた。これにより、WAVOCが得意とし、独自性としてこだわってきた「丁寧なふりかえり」は、現時点では復興支援ボランティアには実施しないことにした。

とはいえ、「被災地でのボランティア」という貴重な経験から、可能な限り学生には気づきを得てほしい。そこで、短期間の活動に組み込めるふりかえりとして、帰りの車中で「感じたことの発表」および「ふりかえりシートの記入」を実施している。さらに帰京後は、参加者を集めて「東京に帰ってきて感じたこと」のグループディスカッション、Webサイトへの報告文の執筆なども、ふりかえりの一環として実施している<sup>4)</sup>。

## 7-2 ボランティア活動への単位認定の是非

復興支援ボランティアの教育的観点からの議論として二つ目にあがったのは、単位認定の是非であった。4月に文部科学省から大学に対して、「ボランティア活動への単位認定を配慮するように」と通知があった。

これまで WAVOC では、「教員によって組まれた」「科目」には単位認定があっても、「学生が主体的に実施した」「ボランティアプロジェクト」（課外）に対しては、単位認定をしてこなかった。復興支援ボランティアだけを「特別あつかい」して単位認定することへの抵抗感があった。これまでに実施してきた国内、海外における 30 あまりのボランティアプロジェクトは、どれもそれぞれに意味のある活動であった。「単位認定してもらえないのか」という要望は何度もあったが、それに対しては「ボランティアの目的が、社会貢献から単位認定にすりかわってしまう危険性を生む」ことを危惧して、単位認定してこなかった。それは、「利己性よりも利他性を意識して活動してほしい」という意図であり、「利他的に活動した学生のほうが成長する」という経験にもとづいた WAVOC の仕組みであった。検討の結果、根本的理念に矛盾を生じさせるような措置はとらないことにし、従来どおり単位認定はしなかった。

## 8. これまでとこれから

以上のような体制をつくりながら震災からの半年を走ってきた。ふりかえってみると、第一段階の3月は、大組織の中にあるが故の機動性の低さから直接的な支援活動ができなかったが、「ボランティアの心得 10 か条」の作成という、これまでの経験を生かした発信をすることができた<sup>5)</sup>。第二段階の4月は、試行錯誤しながら石巻へのボランティア派遣を実施し、その後につながる泥かきボランティアのスタイルを確立した。ここでは、これまでの海外ボランティア派遣のノウハウが非常に役立った。第三段階は5月で、多数のボランティアを派遣するために、後方人員と資金の確保で

体制を固めた。そして、6-8月とはとにかく疾走期で、多くのボランティアを送り出し、のべ1263名を派遣することができた。この間、大きな事故がなく活動できたことは、教職員の努力はもちろん、現地の校友やDVC職員の方々のご協力あってこそだったといえる<sup>6)</sup>。

復興支援は、現在、大きな転換期にきている。半年たつて瓦礫の撤去やかたづけが進み、大人数による泥かきボランティアのニーズは収束してきた。現在求められているのは、多様なニーズに対応するきめ細やかな活動である。これまでよりもさらに、現地情報の把握や地域の方々との連携が必要になる。継続的にボランティア学生を送り出す新しい仕組みを作るため、第二の模索を始めているところである<sup>7)</sup>。

## 注

- 1) WAVOCとしての震災前からあった唯一の被災地のつては、WAVOCボランティアプロジェクト「思惟の森育林」の活動地である岩手県田野畑村だった。50年前から早稲田大学が森林保全活動を実施してきた村であるが、震災と津波によって31名の死者行方不明者が出た(2011年9月11日時点)。真っ先に震災ボランティアの派遣候補地になったが、現地の混乱が激しく「東京からのボランティアを受け入れる状況ではない」との回答だったため、3月の派遣は見送った。現地状況が落ち着いてきた4月末からは、定期的に学生チームを派遣している。
- 2) 学生にできる復興支援ボランティアには、①肉体労働系(泥かき、片づけ)と②プログラム系(音楽、スポーツ、勉強、遊びなど。心のケアにつながる)がある。現地のニーズは、まず①があり、3ヶ月が過ぎた頃から②も求められるようになってきた。WAVOCでは、二つのタイプのボランティアをどちらも実施しているが、本稿では、真っ先に開始し、派遣人数の多い①の泥かきボランティアを主に取り上げている。
- 3) WASEDA サポーターズ倶楽部は、「早稲田大学後援会」が2009年に改称した組織で、本学の教育研究の充実に財政的に支援することを目的に、主に校友から寄付を受付けている組織である。
- 4) 震災ボランティア経験をふりかえったことによる学生の成長に関しては、加藤(2011)に、彼ら自身の言葉で綴られている。被災地に対する想いや、帰京後の意識の変化を読み取ることができる。
- 5) 民間NGOとの比較では、WAVOCは「機動性が低かった」が、大学に設置されたボランティアセンターの中では「いち早く動いた」と見ることも可能である。
- 6) 本論では記しきれなかった教職員の詳細な動きに関しては、岩井(2012)を参照いただきたい。
- 7) 校正を行っている現時点(2012年1月)では、WAVOCは、①岩手県遠野市を拠点とする特定非営利活動法人遠野まごころネットへの定期的なボランティア派遣、②宮城県気仙沼市社会福祉協議会と連携した仮設住宅でのお茶っこ飲み会の開催、の二つの活動を軸にしている。2011年12月末時点での派遣総数は1660名である。

## 参考文献

- 岩井雪乃(2012)『学生のパワーを被災地へ!—「早稲田型ボランティア」の舞台裏』、早稲田大学出版部、pp99。
- 岩井雪乃・兵藤智佳・秋吉恵(2011)「WAVOC メソッド解説」『Learn through Experience「キャリア」を紡ぐ WAVOC メソッド』、早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター:2-3。
- 加藤基樹(2011)『0泊3日の支援からの出発—早稲田大学ボランティアセンター・学生による復興支援活動』、早稲田大学出版部、pp94。
- 外川隆(2011)「早稲田型震災復興支援ボランティアをめざして—学生・教職員・校友共同による WAVOC の取り組み」『早稲田学報』1188:76-79。
- 和栗百恵(2010)『「ふりかえり」と学習—大学教育におけるふりかえり支援のために—』『国立教育政策研究所紀要』139:85-100。

## Student Volunteers and WAVOC

Yukino IWAI

Responding to Tohoku Earthquake and Tsunami on March 11, the Hirayama Ikuo Volunteer Center of Waseda University (WAVOC) has sent 1,263 student volunteers to the affected areas in the first six months. Although WAVOC is not emergency relief organization, it has rapidly developed a pattern of sending students; they arrive on overnightbus in the affected areas, scrape sludge and clean away rubble until evening, and come back to Tokyo on overnightbus again. A new employed volunteer coordinator, some staff in other sections of the university, and graduates associations of Waseda have supported WAVOC staff in logistics. This collaboration is main key of increasing number of volunteers.

**Key words** : volunteer, scraping sludge, coordinator, graduates association